

ママゴンになりたくない！

向 後 紀 代 美

一昨年の夏、ロンドンに住んでいた私達は、思い立つままに英国一周の旅にでた。私達、つまり夫の元彦、同じフラットの貧乏学生仲間のTさん、それに私の三人。オンボロ車に食糧とテントを積みこんで、とにかく一路「北」へと進路をとった。運転の夫と道探しのTさんは、病的なほどの古本好き。町に入る度に名所旧跡はそっちのけで、古本屋の看板を求めて、狭い路地に入り込む。

三週間後、最北の島シエトランドから、スコットランドのヒースの原、ウェールズの炭坑地帯と、地図上の赤線はのびて、いよいよ旅の終結に近いコンウォール半島に入った。北国でもここまで来ると夏の輝きがある。青い海に面した、とある港町で、私達は例によって古本屋の戸口をくぐった。ほこりをかぶった本冊の片隅にあった本を、私が無気なく手にとってみた。Home is a Tent（我が家はテント）の題名に魅かれたのである。ページに斜めに目を通しただけで、私は思わず狂喜してしまった。そこに私の求めていた一人の女性、いや、一つの家族の姿があったのだ。

著者のシンプソン夫人は、登山や探検の大好きな女性で、夫と共にグリーンランド横断（女性で初めて）をしている。それだけなら感心はすれど、私としてそれ程共感はしない。びっくりしたのは、いついかなる辺地にでも、幼い子供達を連れて行っている夫妻の信条であった。長男のロビンは生れて三ヶ月でスピッツベルゲンに行っている。極寒の地に生れたての赤ん坊などとんでもない……と親戚には反対されたが、エキスモーヤラップ人の子供達は立派に育っているし、エジンバラ（夫妻の家があった）のバスの中よりも、よっぽど病原菌は少い筈、と主張を通したのである。毛皮のコートを赤ん坊用寝袋に作りかえ、たくさんのベビー・フードの罐詰を用意した。新たに家族の一員となった赤ん坊の必要としているものは、食物と愛であり、それには家族三人が共にいることこそ大切なのだ。ロビンは遠征隊のマスコットとして、厳しい自然にもめげず育っていった。

翌年、次男のブルースが、2年後には長女ロナが誕生したが、シンプソン一家は週末をいつも大自然の中のテントで過ごしている。夫人は洗濯機や電気毛布のある文明の生活を受する一方、それらがなくても幸福に生きられることを知っていた。そして子供達にもそのような価値感を教えたいと願っていた。

長女ロナが一カ月半の時、彼らは結婚後2回目の遠征アイスランドに向う。その後も南米のスリナム、グリーンランドと遠征が続く。もちろん、彼らのかわいい子供達が一緒なのはいうまでもない。

この本に出会って、わが意を得たりと喜んだのも、実は私がある時八カ月の身重だったからなのだ。深夜まで走って、テント泊りという強行スケジュールの旅も、無事に終り、その年の冬、ロンドン市内

の病院で長女「江美」が誕生した。＜我が家はテント＞の影響は、わが一家にも及んだ。生後2週間の江美を後座席にのせて、英仏海峡を越えてフランスをドライブ。生後一カ月目に、長女は富士山頂ほどの高さのユングフラウ・ヨッホの氷河上にあがった。彼女は高山病にかかるどころか、おなかが空いたことを知らせる為に、元気に泣くほかは、スヤスヤと眠って、ヨーロッパの観光客をびっくりさせていた。

それから一年近くがすぎて、今、私達一家は、東京郊外の団地に住んでいる。江美も天才的いたずらに育ち、朝から晩まで彼女の世話にあけくれている。しかし、子持ちの身分は私だけではなかった。お茶大の同期生の間でも、2・3年前の結婚ブームに引き続いて、今はベビー・ブーム。舞い込む手紙もベビー・ギャングの動作に一喜一憂しているママさんからのものが多くなった。同じ環境下の人間は共感性も強い。はじめは私も手紙を受け取る度にほほえましくも、嬉しくもあった。しかし、時が経つにつれて、「本当はこれでよいのだろうか」と疑問をもちだした。この調子では、数年後、教育ママ、ママゴンのブームが訪れないとは限らない。＜良妻賢母＞は我が大学の伝統と聞くが、新しい価値観が求められている昨今、私達ママ族も新しい母親像を考えなければならないような気がする。私は再びシンブソン夫人とその一家を思い起す。彼女の生き方こそ、新しい母親像の一つを示しているのではないだろうか。

(11回生)

地理教育雑感

平田茂子

高等学校で地理を教えるはじめて、まもなく丸3年になろうとしています。その間に体験したこと、特に地理学習についての感想をこの機会に綴ってみようと思います。

従来、一般には洋の東西に関するいろいろな知識を伝授するのが地理であると考えられていたようです。私が高等学校時代に受けた人文地理の授業もその域を脱していなかったと記憶していますし、教科書にそってそれに忠実に教案を作成していた初めの頃の私の授業も、自然環境の学習を別にすると、多少その傾向があったことを認めなければなりません。

しかしながら、新聞・雑誌・テレビ・ラジオ・映画等のマス・メディアが高度に発達した現代においては、そういった単なる雑学的知識のおしつけが主体を占める地理の授業は他の教科と較べて生徒からそっぽを向かれてしまうとしても、それは当然のことであって、私は次のような点に注意して授業を進めるように心がけています。

他の教科についても言えることですが、地理学習の内容は、現実の私達の生活、社会と密接に結びついたものでなければなりません。私は、新聞の切抜きや雑誌の記事を教材としてよく用い